

アイヌ語地名と生活空間に対応した風景の考察 —北海道旭川市嵐山・神居古潭地区を事例として—

奥野 哲也

1. 背景と目的

近年、風景として捉えられる対象の範囲が広がりつつある。日本の風景計画では、市街地周辺の空間評価に留まらず、歴史的街道などの人々の営みや、農地などの土壌を含む生態系も、風景の一部として捉え、計画対象にしようとする動きがみられる。

北海道には、アイヌ民族（以下、アイヌ）が生活していた土地が各地に存在する。一部地域では、それらを風景として位置づける取り組み¹⁾があるものの、アイヌの生活していた土地が、明治期以降の近代都市計画の中で位置づけられ、認識されている事例は少ない。

そこで本論では、北海道の風景と、アイヌの生活空間の関係から、アイヌにとっての風景の意味を明らかにすることによって、現代の北海道における風景の概念を広げ、風景計画の対象範囲を拡大することを目的とする。

2. 研究の方法

本論では上記の目的のため、①北海道における風景を捉える視点を整理する。②文献より、アイヌの生活体系を支える項目を抽出し、③②の項目を元に、事例地域の調査分析から、現代の北海道の風景とアイヌの生活空間の関係を明らかにし、北海道の風景計画の対象範囲が広がることを示す。④現代の北海道の風景を捉える視点を考察する。

事例地域として、北海道旭川市嵐山・神居古潭地区を選定した。この地域一帯は、明治20年代まで開拓の手が及ばず、アイヌの生活空間が保たれていたとされる。また、アイヌ語地名とその解釈が確立され、研究資料が豊富にあることから選定された。

3. 北海道における風景を捉える視点

3-1. アイヌ語地名の定義

北海道の地名に関する文献の山田²⁾は、アイヌ語地名の多くは、地形などの自然地理的状況を指すことを特徴としている。これより、本論では、アイヌ語地名を「アイヌが生活していた空間の情報を有する地名」と定義する。

3-2. アイヌの生活空間の定義

アイヌの生活に関する文献の高倉³⁾、手塚³⁾は、アイヌは狩猟採集や交易のため、海、山、川、盆地などの環境に即し、広域の範囲を日常的な生活の場としていたとされる。これより、本論では、アイヌの生活空間を「擦文期から明治初期にかけて、アイヌが気候・地形・動植物等の、自然・地理的特徴を読み取り構築してきた空間」と定義する。

3-3. 北海道の風景の定義

近年の風景に関して中川⁴⁾西村⁵⁾は、「歴史、文化を含む人々の生活に関わる対象」や、「植生、地形、地質などの生態系に関係する対象」を、風景として評価することに言及している。アイヌは生活空間のなかで、風景に関して議論されている対象を包括した上、認知していた可能性があることから、本論では、北海道の風景を「アイヌの生活空間と関連しうるものを評価する概念」として、定義する。

3-4. 研究の視点

研究の視点（図1）として、以下の3点を文献から整理する。(1) 北海道各地に点在するアイヌ語地名は、地名研究により解釈されている。(2) 地名はアイヌの生活空間のなかで意味を有している。(3) 北海道には、アイヌ語地名に対応した風景がある。この3点を踏まえ、(4) 北海道の風景と、アイヌの生活空間の関係を明らかにし、北海道の風景の意味を抽出する。

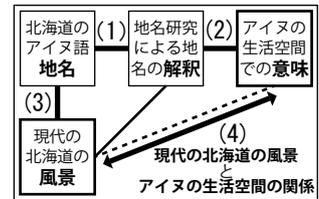


図1 研究の視点

4. アイヌの生活体系を支える要素を抽出

文献の手塚³⁾、瀬川⁶⁾から、その生活体系を支えていた項目（表1-a）を5つに整理した。【河川交通】河川交通はアイヌにとって、狩猟採集や交易のため、広域の移動手段であった。主な内容としては、地形、川、岩、丸木舟、が挙げられる。【狩猟】狩猟はアイヌにとって、食料確保のための生命に関わる存在であった。主な内容としては、サケ、クマ、シカ、が挙げられる。【採集】採集はアイヌにとって、交易品や生活用品の原材料を採取する、生産に関わる存在であった。主な内容としては、原材料採取、植物採取が挙げられる。【交易】交易はアイヌにとって、生活用品や食料などを獲得する存在であった。主な内容としては、「地域集団領域の範囲」、「集落の位置」が挙げられた。【信仰】信仰はアイヌにとって、生活を営む上での行為すべてに関係する。主な内容としては、信仰の中でも最も重視された、クマ送りの場、信仰に関係すると言われる、チャシが挙げられた。この5つはアイヌの生活体系を支えていた。

生活体系を支える5つの項目	
5項目 (a)	生活空間に関わる主な内容 (b)
河川交通	地形 川の形状 岩の形状
狩猟	サケ漁域 クマ猟域 シカ猟域
採集	植物採取栽培域 原材料採取域
交易	地域集団領域の範囲 集落の位置
信仰	クマ送り場 チャシ

5. 事例地域の風景調査・分析

5-1. 調査対象の選定

文献の尾崎⁷⁾、由良⁸⁾より、北海道旭川市の195個の解釈されたアイヌ語地名から、現代もアイヌが生活していた空間が残る、嵐山・神居古潭地区の11個の地名を選定した。

5-2. アイヌ語地名と北海道の風景の関係（図2-A）

地名研究によるアイヌ語地名の解釈を整理し、アイヌ語地名と北海道の風景の関係を調査・分析した（図2-A）。その結果、写真と地名が対応することが確認された。例えば、「①シラツチセ」では、二枚の岩が重なり合うことで、小屋状の空間があることが認められた。「⑥テン」では、テンと呼ばれるアイヌの漁網施設とよく似た構造をした岩が、河川を塞ぐように位置していることが認められた。

5-3. アイヌの生活空間と北海道の風景の関係（図2-A, B, C）

地名の有しているアイヌの生活空間での意味について、

The Scenic Study based on Ainu's Place Name and Lifestyle

-The Case Study of Arashiyama and Kamuicotan District of Asahikawa, Hokkaido-

OKUNO Tetsuya

A 地名と生活空間と風景の関係					
【凡例】 アイヌ語地名	①シラツセ	②クツネシリ	③パラモイ	④イヤブテウシ	⑤シケウシバ
アイヌの捉えた風景 アイヌが重要視した風景の要素					
アイヌ語地名の訳	岩屋	岩崖になっている山	広い湾	荷物を陸揚げする所	荷物を負いつけている所
地名研究によるアイヌ語地名の解釈	二枚の岩が重なり空間がある岩を指し、一時休憩所として使われたことから付いた地名	岩肌がむき出しになった山を指し、その象徴的な眺めから付いた地名	広く湾状に広がった河川の形状を指し、川の形状から付いた地名	川に迫り出した岩場を指し、丸木舟から荷物を陸揚げしたことから付いた地名	平らな岩場一帯を指し、アイヌが荷物を背負い岩場を歩いたことから付いた地名
生活を支える5項目(表1)	交 狩 信	狩 信	交 易	交 易	交 易
⑥デシ	⑦デシヤオマナイ	⑧ルイカルシ	⑨パンケアウッシナイ	⑩パンケアウッシナイ	⑪オサラッパ
梁槽	岩梁の横に入る沢	砥石を取りつける所	下手のオヒョウニレの群生する沢	上手のオヒョウニレの群生する沢	川岸が開けた地形
漁気施設である梁に似ている大岩を指し、河川を跨ぐ様な岩の形状から付けられた地名	漁気施設の梁に似る象徴的な岩の横に流れる沢を指し、沢の位置から付いた地名	生活用品である砥石のある岩を指し、そこから砥石を削り取ったことから付いた地名	オヒョウニレが群生している沢を指し、衣服の原材料が取れることから付いた地名	オヒョウニレが群生している沢を指し、衣服の原材料が取れることから付いた地名	河口部が開けた形状になっている川を指し、河口部で視界が開けることから付いた地名
交 狩 易	交 狩 易	採 易	採 易	採 易	交 狩 易

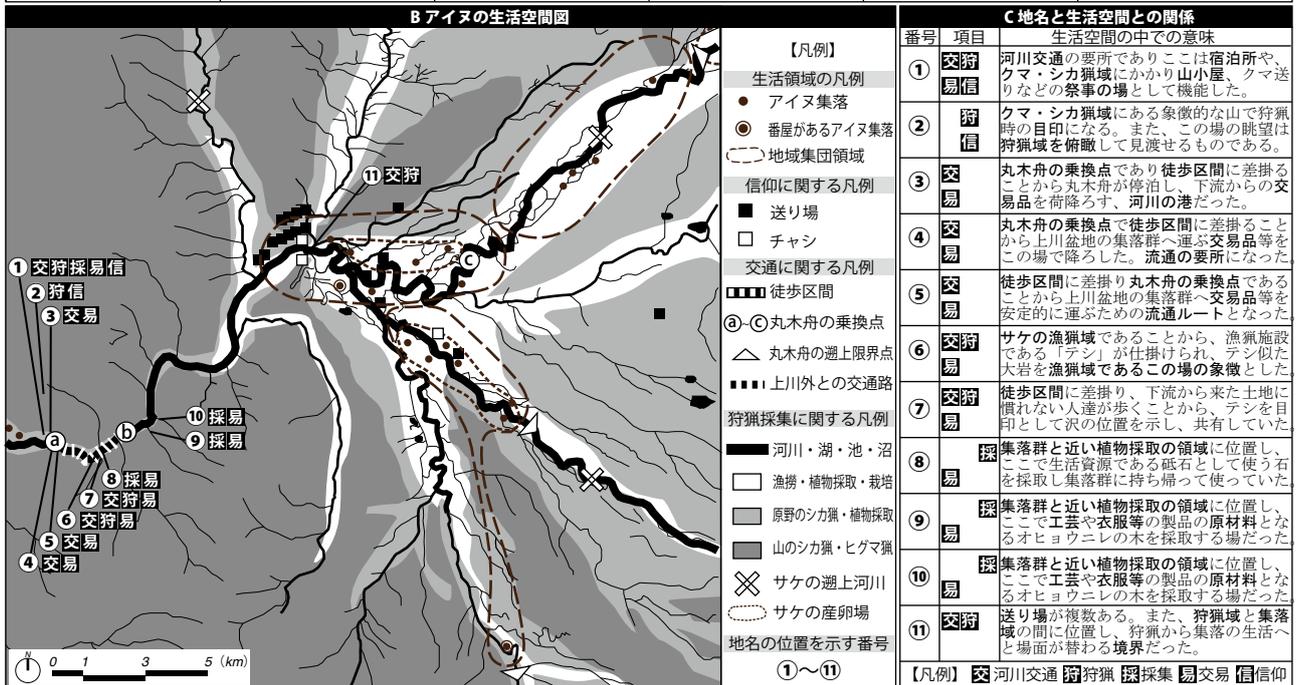


図2 アイヌ語地名-アイヌの生活空間-北海道の風景の対応関係

5つの項目(表1-a)と、渡辺⁹⁾、瀬川¹⁰⁾らの文献より作成したアイヌの生活空間図(図2-B)を、用いて分析を行った(図2-C)。その結果、アイヌの生活空間と北海道の風景の対応関係が明らかになった(図2-A, B, C)。例えば、「⑤シケウシバ」は、河川交通の状況から、交易品等の荷物を徒歩で運ぶ必要があり、上流域の集落群まで、交易品を安定的に運ぶための流通ルートを意味した。それは、写真で確認される、川岸の平たい岩場一帯を指す(図2-A⑤)。「⑧ルイカルシ」は、狩猟道具を研ぐ砥石が取れる所として、採集の場を特定することを意味した。それは、写真で確認される岩の白い斑点を指す(図2-A⑧)。「⑨パンケアウッシナイ」、「⑩パンケアウッシナイ」は、漁撈・植物採取・栽培の領域に位置し、工芸や衣服等の製品の原材料となる、オヒョウニレの樹木がある所として、採集の場を特定することを意味した。それは、写真で確認される、川沿いに現在も群生する、オヒョウニレの樹木を指す(図2-A⑨⑩)。これらの写真で確認された風景自体が、アイヌの生活空間における意味を有していたと考えられる。

6. 現代の北海道の風景を捉える視点

以上のことから、北海道の風景は、アイヌの生活空間のなかで、多くの意味を持つことが明らかになった。アイヌの生活空間は、生業も儀礼もともに、環境への適応手段と位置づけ、活動・行為と環境との間に取り結ばれる、諸関係の体系を総合的に捉えようとする、アイヌエコシステム^{2*)}に基づいていた。このアイヌエコシステムに基づいた空間を、風景として位置づけることによって、北海道における風景の概念は広がる可能性がある。また、北海道の風景が、アイヌエコシステムに基づいた意味を持つことで、地域固有の価値を見出すことに繋がり、土地利用等の計画に反映できる可能性が考察される。

【注釈】1* 文部科学省による「アイヌの伝統と近代改革による沙流川流域の文化的景観」登録(北海道沙流郡平取町)とそれに関わる取り組み2* アイヌエコシステムとは、渡辺仁が提唱したアイヌの文化体系を表した概念【参考文献】1) 山田秀三「アイヌ語地名の輪郭」1995, 2) 高倉新一郎「アイヌ政策史」1943, 3) 手塚薫「アイヌの民族考古学」2011, 4) 中川理「風景学-風景と景観をめぐる歴史と現在」2008, 5) 西村幸夫「日本の風景計画-都市の景観コントロールと将来展望」2003, 6) 瀬川拓郎「アイヌの歴史-海と空のノマド」2007, 7) 尾崎功「アイヌ語地名地誌: 上川盆地の川と山」2002, 8) 由良勇「上川郡内石狩川本支流アイヌ語地名解」2004, 9) 渡辺仁「生態」1977, 10) 瀬川拓郎「アイヌエコシステムの考古学」2005